

■（１７０）普段着の大人と被災地の将来を語った高校生たち

被災地は「人口減」におびえている。民間研究機関の試算では、岩手県釜石市の人口は2040年に19,000人で、今より6割減る。そこに被災の影響が加わると……。復興策を練ってきた大人たちは、どこまで金をかけて復興させていいのか不安になっている。

そんな折、若者や若い気持ちを持った人を対象とした、「釜石百人会議」が催された。年齢や肩書などは関係なく、大勢でわいわいとまちの未来を語り合いながら、新たなまちづくりの芽が生まれることを期待しようという企画だった。

集まったのは10代～80代の100人余り。副市長や地元商工会議所会頭、県幹部のおじさんらも精いっぱい私服で臨んだ。4、5人の輪になっての話は弾み、参加した地元高校生たちも「大人と話をするのも意外とおもしろい」と笑顔。最後は若者から「都会化するよりも、豊かな自然を残して欲しい」「過去のいい時代は忘れて、今のまちを考えよう」などの声が出た。

震災で人口減と高齢化が加速されている被災地を、「日本の将来」とダブらせる人もいる。被災地をどう復興させるかは、全国の未来を占う試金石なのかもしれない。

（山）